

6月17日(月)

おはようございます。

吹田市で警察官が襲撃され拳銃が奪われるという怖い事件がありました。犯人が逮捕され拳銃が使われることなく解決して本当によかったと思います。

さて昨日は、清風の同窓会の催しがありました。講演会の講師は、モントリオールオリンピック団体の金メダリストで、国際体操殿堂入りを果たされた「藤本 俊」先生でした。先生は国立、山梨大学の教授を経て、現在は名誉教授になられています。世界の国際体操殿堂入りは日本で13人目、清風の卒業生としては、監物永三氏に続き二人目の快挙でした。

この藤本先生のお話を聞いて、私は非常に面白く感じました。そこには、体操をやっていない諸君たちにも、とても参考になる内容があると思いますので、ここでお話ししてみようと思います。その印象を10分でうまく話せるかどうかはわかりませんが。

東京オリンピックで日本体操が、金メダルを五個獲得したとき、藤本先輩は中学生だった。テレビで見ているオリンピックの姿はすごくて、「この人たちの先祖は忍者ではないか」と思ったという。しかし、大阪の競技会でその姿を見てみたら、テレビの迫力とは違って、「たいしたことはないな」と思えた。サイン会にも行った。自分の1メートル前で終了したものの、選手を間近で見て、「この人たちは普通の人じゃないか。この人たちで出来るのなら、自分にも出来るのではないか」と思った。そこで、自分も体操をしようと清風高校に入学した。だからまったく体操の経験のないまま彼は清風に入校したのです。

入ってみたら、「見る」と「やる」とでは大違いで、清風の体操部はすごく強かった。今はトミオカ体操スクールをやっている富岡先輩がおり、彼の演技は、見惚れるような素晴らしさで、とても自分には真似できないと思ったという。

やがて、高野山修養行事を迎え、自分は体操で物になりたいのだから、「行事で気を引き締めてきちんと過ごさなければならない」と考え、写経のときもそう思い、奥の院でもそのようにお願いをし、最後まで緊張感を持って過ごした。

その後体操部に入部した。体操部ではとにかく富岡先輩がすごかった。先輩の行う演技を全て目に焼き付けるように徹底的に見ていた。するとだんだん自分もそれと同じことができるようになったという。

高校生になってから、体操を始めたのでハンディがあった。他の

選手たちと比べて体力がないと感じた。そこで、先ず朝起きてからトレーニングしようと思った。けれども、三日坊主で続かない。他に何かいいトレーニング方法はないかと考えた。朝の団地の新聞配達がいいのではないかと思い、応募した。団地にはエレベータなどなくすべて階段を上り下りして鍛えながら配達した。さらに、片道1時間、往復2時間かかる通学電車の中で、電車が動いているときは、〈つま先立ち〉をし、駅に着いたら〈休憩する〉というルールを自分で勝手に作って実践した。とにかく他の人がやっていない時間に、集中して自分の体をトレーニングする工夫をした。

当時の生徒朝礼訓話は、校祖岩峯先生でした。先生は「本気でやらなければならない。本気でやれば不思議な力が湧いてくる」とおっしゃった。これは自分にとって良い話だったそうです。岩峯先生は、本気でやれば叶うということを何度も言っていて、「それを信じてやれば叶うのではないか。そのためには本気でやらなければならない」といつも自分に言い聞かせた。体力がないのであれば、新聞配達をやったり、他の選手よりも体幹が劣っているのなら、〈つま先立ち〉をやったりということがその表れであったのです。

また、彼はノートを付けていた。自分が感じたことを、練習ノートに毎日つけた。当時の体操部の指導がそういうものだったのかもしれません。最初のうちは、「グーと曲がって」とか、「どんと落ちて」とか、擬音的な描写しかできなかつたけれど、やがてそれらを自分で分析して、文字にできるようになった。そうしたら、なんと技でもできるようになった。文字でできる、頭でできる理解によって、明らかに体操で応用が出来るようになった。

高校から入部したけれども、そういった努力が実り、3年生のインターハイで、平行棒と鉄棒を優勝しました。その後はインカレでも活躍し、オリンピックにも選ばれました。モントリオールオリンピックでは、膝の半月板を痛め、普通ならば気絶するので麻酔を打たなければならないほどの痛みにもかかわらず、麻酔を打てば、演技ができなくなるので、そのまま演技を続け、団体優勝に大きく貢献しました。そのまま表彰式にも出たのだそうです。

こういう姿勢が高く評価され、国際体操殿堂入りをしました。その後、山梨大学への就職の話が出たとき頑張って手を挙げました。しかし、本当は体操が終わった時に燃え尽きていたのだそうです。オリンピックで金メダルを取って燃え尽きていたときに、清風で体操の面倒をみていた、田中先生から「アマチュアに引退なし」という励ましの手紙がきて、そこで気持ちを切り替えた。これも人生上の大きなヒントとなったと話されました。

「自分で勝手に引退を決めているだけのことで、まだまだ体操で貢献できるはずだ。アマチュアに引退なし」、まさにその通りだと思って、山梨大学にチャレンジして採用された。しかし他の人たちは、ドクターを持っている人たちで、大学院を出ていないのは自分だけだった。研究的には難しい面もたくさんあり、学閥もあってつらいこともあったけれど、オリンピックの体操にむけて、苦しい練習に耐えて切り抜けてきたことを思えば絶対にやり切れると思った。体操でやってきたことの方がよほどしんどかったという。やがて、教授へ就任し、評価されて、名誉教授にまでなられた。現在は木曜日だけがお休みで、他の日は様々な大学に呼ばれて講演をしているとおっしゃっていました。

「本気でやれば道は開ける。」それと、「核心に触れるまで努力する」というのは同じことです。高野山修養行事の話も、朝礼の話も、藤本氏が私を喜ばせるためにしたのではありません。OB会の講演で、自分の人生を振り返ってされたお話です。

どれも自分にとって前向きな決断をするためのとても大きな機会だったということであり、朝礼は心が折れそうなときに聞いていて、「自分はまだまだ本気ではない、もっと本気でやらなければならない」と、こういうふうに捉えて、自分は物になれたというお話でした。今でも通じる話だと思いますので、諸君も藤本先輩の清風魂を自分の清風魂として頑張ってくださいと思います。今日の話はこれで終わります。

学校長